

# 茅ヶ崎の祭り「浜降祭」

2024-7-15

野口幹夫

今日は 海の日で 茅ヶ崎海岸では 早朝から浜降祭で大賑わいだ。コロナ前は 何度も見に行っていたので、今年も行こうと思い いつものラジオ体操に 自転車で参加し 終われば そのまま見に行こうとしたら、なんと後輪がパンク。行くのをあきらめた。そのかわりに昔とった写真で紹介したい。



茅ヶ崎と寒川町にある 30 数社の神社が一斉に茅ヶ崎海岸に集結し禊をする壮大な神事だ。

昨日の夜 10 時過ぎから各神社で人が集まる。

私の近くの熊野神社は こじんまりした村社で 今は宮司は住んでいないが、その晩は顔を出す。聞いてみれば先代までは ここの宮司として住んでいたが、今は横須賀に転居して公務員をしているが この晩は神事をするため 戻ってくるそうだ。神輿の担ぎ手も 半分はよそ者だそうだ。神輿を倉庫からだし きれいにして 社で神事をして 神社を 3 時ごろ出発。1 週間位前に あらかじめ通りに張り巡らした「しめ縄の道」を お神輿を担いで海岸に向かう。一部は軽トラに乗せて走るが、なるべくは担いでいく。

6 時半には茅ヶ崎寒川の各神社の神輿が集まってきて、海岸に並ぶ。各社の名を入れた幟も立ち並ぶ。7 時 やがて神官たちも勢ぞろいし 禊の神事を行う。群衆は それを取り囲み緊張している。約 20 分やがて神事が終わると 一台ずつ引き上げが始まる。その帰路だ。すべてではないが 元気な社連は海岸に行き、担ぎ手は膝まで海水につかり、神輿を波にさらすのだ。お神輿の海水禊だ。

すべての神輿が海岸を去り、国道 134 号線から消えるのは朝の 8 時頃だ。

茅ヶ崎は 江戸時代はさびれた漁村だった。2 代目団十郎の演じた歌舞伎 18 番「外郎売」のセリフには 江戸から小田原までの宿場の旅を語るところがあるが、そこに茅ヶ崎の名前は無い。認知症予防に 毎日ラジオ体操の帰り道 このセリフを暗唱しているので その部分を紹介しよう。「オツとがってんだ、五反田 川崎 保土谷 戸塚は走っていけば、やいとすりむく三里ばかりか 藤沢 平塚 大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして 早天早々小

田原とうちんこう」江戸を離れる五反田から小田原までの宿場町を順に読み込んだこのセリフに茅ヶ崎はない。当時は 小和田とか 南湖といった村が 閑散と散らばっていただけだ。だからこの浜降祭も歴史は古くないだろうと見ていたが、意外と江戸の末期だった。それは近くの大磯で行われている平安時代から続く古い祭に絡んだ ある事件から発生したようだ、そこまで戻ってみよう。

平塚の更に隣の大磯は平安時代 国司の館が置かれていた。奈良の都から国司があたししく着任すると 相模の国の主な神社 5 社がお迎えした。それを記念した祭りが今も大磯にある。国府祭（こうのまち）と呼ばれ 毎年5月5日に行われる。大磯の 東海道から北へ数キロなだらかな丘陵がある。 神揃山という。ここに相模の国の古くからの神社 5 社の神体を収めた神輿が集結する。順に一宮：寒川神社（寒川町）二宮：川勾神社（二宮町）三宮：比々多神社（伊勢原市）四宮：前鳥神社（平塚市）五宮：平塚八幡宮（平塚市）で 神揃山の頂上には それぞれの石碑が置かれている。なお このほかに 六所神社というのが大磯東海道に面して存在するが、これがこの 5 社を合祀した神社で 国司の参拝に便利にするためにつくられたものだ。

おもしろいのは、ここで行われる祭事で まるで能のような「座問答」が演じられる。一宮寒川と二宮川勾が 一位の席次を争うのだ。虎の敷物を目指して、そろそろと両者が進む。そして最後は 三宮比々多が仲裁に入り、高らかに「この勝負 決着は翌年に」と宣言して終わる。神社同士がその地位争奪をしていることが コミカルに示される神事だ。

これも写真にとってきたので御覧に入れる。

国府祭（こうのまち）が行われた神揃山



この祭事は歴史が古い。奈良時代の国司に由来するので養老年間にその紀元があるそうだ。

さて話を戻そう。この「こうのまち」祭りに参加し、各々の神輿は、自分の神社への帰途についた。寒川町の寒川神社は 相模川の川向にあるので 相模川の渡し場について 渡し舟をまった。なぜか そこへ四宮の前鳥神社の神輿がやって来た。四宮は平塚の相模川沿いとはいえ川の手前があるので 船着き場には用がないはずだ。しかしなぜかここで両者が鉢合わせし、つい取っ組み合いの争いがなったという。いつも 相模一の宮の寒川から格下にみられる四の宮にしては、自分たち神社の祭神は応神天皇の子で格式は高いのに 一方寒川神社の祭神は 地元の豪族に過ぎなくせに 一の宮として威張っていると、ここで出会ったことから腹いせが爆発したのかもしれない。とうとう大きな寒川神社の神輿を 相模川に投げ落としてしまった。天保 11 年（1840）のことである。むろんすぐ訴えられ四宮の氏子にはきつい断罪が下された。

寒川神社の神輿はそのまま海に流れて見えなくなった。幸いなことに数週間後、茅ヶ崎の海岸 南湖の漁師が漁に出た時 漂流する神輿を発見し引き上げた。そして、無事寒川神社に戻された。

この事件を機に 寒川神社は感謝の気持ちをもって、毎年引き上げてくれた南湖の岸で夏の禊をするようになった。これが「浜降祭」の始まりであり 由縁である。その後、寒川神社は茅ヶ崎の神社各社に参加を呼びかけ、年々その数は増えていった。今 2023 年は中小全社である 34 社 39 基が参加した。その前夜は茅ヶ崎の町中が騒ぐし、神輿が渡御する 6 時半からの朝は、国道 134 号線大混雑。海岸の賑わいは盛大だ。

しかしむろん平塚の四宮神社は参加していない。